

ニルヴァーナ

nirvana



第4号 平成16年1月



本部：平田是賢（大円寺）
 三重県桑名市入江町31 〒511-0086
 電話：0594-23-1316
 Fax：0594-22-9382
 東京支部：
 並里まさ子
 群馬県吾妻郡草津町乙641-12 郵便377-1711
 電話/Fax：0279-88-6692
 e-mail：fukenc@dan.wind.ne.jp



"イスラム共和国・パキスタン"は、アフガニスタンの隣国で、世界の注目を集めている国の1つです。昨年12月、この国の北と南を見てきました。

日本でも良く知られているのは、ガンダーラ美術と、モヘンジョダロの遺跡かと思います。前者は北西辺境州に、後者は南のシンド州にあります。北のペシャワールは、朝夕はストーブが必要な寒さですが、日中の太陽は、真夏の暑さです。一方南のラルカーナ（モヘンジョダロ遺跡がある所）は、12月と言えども、連日猛暑でした。

何千年も前の遺跡がある一方、建国の歴史は新しく、1947年に独立国家となりました。インドとの分離の歴史も、良く知られています。2002年には日本との国交開始50周年を記念して、多彩な文化交流が行われています。夥しい数の難民・移民をはじめ、難問の山積する国ですが、イスラムの国らしく、さまざまな形のNGOがたくさんあります。今回はそんなNGOの活躍ぶりをご紹介します。並里

療養所の生活断片

廊下で会すと、「どうもどうも」と丁寧にお辞儀をするのりちゃんが、療養所に来てもう何年になるのでしょうか？ 寒い草津ですから、たくさん着込んでいつも手提げを持って歩きます。

のりちゃんのご主人とめぐり合って、療養所の中で結婚しました。ご亭主はとても働き者だったのですが、私が始めてお会いした時はすっかり弱っておられて、間もなく病棟に入室となりました。のりちゃんは毎日毎日、一日に何回もご亭主の傍に来て、辛いこと、苦しいことの訴えに耳を傾けていました。でも本当は、半分も聞いていなかったと思います。だってのりちゃんの耳は、普通にお話したくらいではとても聞き取れないのですから。ご亭主は最後まで、そんなのりちゃんに甘えていたのだと思います。一昨年秋、ご亭主は亡くなりました。最後の数日前、お二人の金婚式のお祝いに、病棟職員と一緒に揃って撮った記念撮影が、貴重な思い出になりました。

雪の降る寒い日、廊下の窓際でのりちゃんが窓に向かってなにやらお話ししているようなのです。「のりちゃんコンニチハ、何してんの？」と、耳元で大きくゆっくり話しかけました。すると「今ウチの人と、お話してた」のだそうです。「あそこ」と、曲がった指を指した方向には、ちょうどまっすぐ向こうに、納骨堂がありました。のりちゃんは、こうして時々今もご亭主とお話しています。



楽泉園IK

投稿ご案内：ニルヴァーナ編集部は、皆様からのご意見を歓迎いたします。本誌に掲載し、さらに多くの方々に紹介して、意見交換の場としても活用させていただきます。

< 連携団体(組織)の紹介 >

特定非営利活動法人:T・M良薬センター (TMRC)

理事長:小野文瑠

事務所:群馬県前橋市総社町総社1024 〒371-0852

電話/Fax:027-254-2325

主として群馬県の日蓮宗寺院団体が組織するNPO

群馬県の草津にある国立療養所栗生楽泉園はハンセン病療養所ですが、ここの在園者の方々と、数十年来交流を続けている団体です。

FIWC(フレンズ国際労働キャンプ・関東委員会)

委員長:藤澤真人

神奈川県横浜市神奈川区西大口116-15 HP:<http://www.mognet.org/>

< 本誌の内容は、このホームページにてカラーでご覧になれます。 >

主として早稲田大学学生とOBよりなるボランティア組織:ハンセン病患者やその回復者たちと、40年以上に渡って交流を続けている集団です。友情の和は 国内外に大きく広がり、アジアの各地に草の根レベルの友好組織を持ちます。



中国便り

中国広東省潮州市のリンホウ村を拠点に活躍する原田僚太郎君たちの行動は、これまでもお伝えしてきました。彼はニルヴァーナの連携団体FIWCのメンバーで、昨年从这个村に住み込んでいます。**(彼の活動報告は、上記のモグネット:ホームページに詳しく出ていますので、ご覧ください)**

彼らは、世間から忘れ去られたままひっそりと肩を寄せ合っている村の人達と友達になり、村の存在を地元の人々に紹介して支援の輪を広げています。村の住人は、かつて患ったハンセン病の後遺症で、重度の障害を持っています。トイレづくり、台所の整備、屋根の雨漏り修理と、何でもやっちゃいます。そんな彼から、昨年12月上旬、お便りが届きました。現地の学生たちを動員して、着々と地盤を築いていることが判ります。

< 以下原田君の手紙より >

リンホウ村の朝晩は、激しく冷え込むようになってきました。草津もさぞかし、寒いことでしょう。・・・中略・・・私の中国駐在の目的は、リンホウ村を支援する学生団体を作ることでした。これは昨年10月、ついに果たされました。潮州市韓山師範学院内に、「愛心小組」という団体が設立されたのです。彼らは1カ月に1度、村で活動することになっています。10月は、村に包帯などを寄付し、11月は日本からの応援部隊と一緒に、家屋修復などをしました。



広州の他の地域や、広東省の高州市、呉川市にも人々の輪が広がっています。12月には、雲南省にも出かける予定です。我々と村人たち、村人と中国の学生たち、学生と我々、学生と学生、これら1つ1つの出会いが、1人1人の人生に響きあって、その人の人生を方向付けていっているようです。その出会いの場は、「ハンセン病回復者の村」、かつて人と人との絆の破壊の象徴だったところです。

若者たちの、何と清々しい活躍ではありませんか！

楽泉園 並里

大阪の多絵ちゃんより

瀬戸内海の邑久(オク)光明園にある"家族教会"は、私にとってなじみ深い所です。私の母校は以前から家族教会の方々と交流がありました。先輩達の最初の訪問は昭和15年にさかのぼり、花壇作りや道路補修などの労働奉仕が昭和58年まで続いたそうです。しかしその後も交流は続きました。私が初めて参加した時、自分が描いていた暗く悲しいイメージと教会員の方の話にギャップを感じ、「可哀想」という言葉がとても安っぽく感じられました。苦悩の中から一筋の信仰という光を見出して生きてこられた力強さに、言葉を失ったものです。この次は、今も私が親しくしてもらっているKさんについてお話しします。

ではひとまずこのへんで・・・

岩井多絵

人物紹介

今回は、私の大切なお友達の1人をご紹介します。名前は"利子さん"。着物の良く似合う美人です。彼女は音楽を愛するあまり、曲を聴いているだけで、作者の心が読めるようになってしまいました！もう何年も前から、日がな一日ヨーロッパのクラシック音楽を聴いて、「譜を読む」ことに明け暮れています。でも実は、日本の芸能にも大変造詣が深く、三味線は師範級の腕前ですし、日本料理もまた、すごいのです！



そんな利子さんから、楽しいお手紙が届きました。皆さんが良く知っている曲、"エリーゼのために"を解説して下さったので、ご紹介します。 <以下利子さんの手紙より>

「ミ#レミ#レシ#レドラ…」と始まる"エリーゼのために"は、出だしの「ミ」の音を、何とか高い高い「ミ」に昇らせたいとする曲です。ヴェートーベン、プラス志向の悔しがり家、努力して目的を果たします。欧米では「ド、レ、ミ…」を「C、D、E…」と呼ぶので、「ミ」の音は「E」となります。"Eの音のために"から"エリーゼのために"と名づけられたと推測します。

さて当時、この曲を弾ける音域のピアノがあったかどうかですが、彼の死の寸前、演奏可能なピアノが完成していました。と云うのも、ヴェートーベンが出現するまでは、モーツアルトの曲のように、穏やかで害の無い音楽が好まれていました。一方ヴェートーベンの曲は、人の心にグサグサと入り込み、扇情的です。当時の一部の人々には、とても許せるものではありませんでした。それが証拠に、常識人である詩人ゲーテは、ヴェートーベンが憧れ続けたにも関わらず、彼を黙殺し続けました。しかしヴェートーベンの新しい音楽は、ピアノ製作者たちを刺激しました。耳が不自由でも聞こえるように「大きい音が出る」とか、作曲意欲が沸くように「音域を拡げる」とかの努力をして、ヴェートーベンに自分の製作したピアノを使って欲しいと願いました。

"エリーゼのために"の製作年代が分かっていないのではっきりしたことは云えませんが、彼の言葉から、「50年位先には演奏可能となるはず」として作曲していたことが分かっています。アレコレ考えると、曲の方が先で、これに発奮して職人さんが演奏可能なピアノを作った、と考えるのがマア妥当でしょうか。



注釈:「譜を読む」とは、独自の方法とルールで、作曲家が曲の中に何を書き残したかを読み取ること。
桑原利子

草津便り

群馬県は山国で、どちらを向いても山ですが、私たちのいる草津の療養所も、海拔1000メートルの所に建っています。今年の冬はとりわけ厳しく、連日氷との戦いです。

夜官舎にたどり着くと、先ず凍りついた家のドアを、滑り止めのついた手袋をはめて力いっぱい引っ張ります。台所も、一面氷の世界です。うっかり部屋に出しておいた野菜は、全て凍ってしまいます。ただ1つ安全な場所は、何と冷蔵庫。この中に入れたものは、凍らずに安全です。冷蔵庫のこんな使い方があったなんて、温暖な三重県で生まれ育った私は知りませんでした。

水道は毎日元栓を閉め空にしてから家を出ますが、凍りついた蛇口は、ひねっても動きません。まずお湯を沸かし、熱湯を蛇口にかけて水道管を温めると、やっと水が出ます。先日うっかり閉めておくべき栓を締めずに熱湯かけをやってしま



い、とんでもない方向に水が噴出して、台所の床に飛び散りました。床に流れた水は、あっという間に凍ります。さてどうなったか、何とスケートリンクに早や変わり！ツルツル滑って歩けません。ストーブをどんどん炊いて部屋を暖め、氷を溶かして雑巾でふき取り、やっと普通の部屋になりました。まるで昔見た、トムとジェリーのマンガのようでした。
楽泉園 並里



パキスタン北部を流れるカーブル川は、やがてインダス川に注ぎます。南部のシンド州には、広大なモヘンジョダロの遺跡があります。

<次回をお楽しみに>





続カリギリ体験記

かつて諸外国では、ハンセン病の治療を専門に扱う組織を持っていました。前号では、インドのカリギリで受けた研修について報告しましたが、ここでも1962年ごろからこの方法が取られていました。ハンセン病についての教育を受けた保健要員が専門医の下で1つの組織を形成し、地域社会でのハンセン病コントロールに携わります。しかし1998年ごろから、他の疾患と共に一般保健活動に組み入れられるプログラムに変わってきました。世界保健機関(WHO)も、この方法を推奨しています。広い地域をカバーし、差別の問題を回避するためです。

しかし、いくつかの国では、今も以前の専門組織が残っています。興味あることに、むしろ患者数が順調に減ってきている国でこの現象が見られるようです。つまり、余裕のある国では、専門組織を残して、より充実した治療を目指しているように思われます。その代表的な国として、これまで経験した中では、ベトナムが挙げられます。

いずれの場合も、ハンセン病はごく普通の疾患として治療される時代です。この写真は、研修を受けたカリギリの村で、患者さん宅を訪問した時に、家族一同で撮ったものです。 三沢市民病院皮膚科部長 間山真美子



古い写真

ニルヴァーナの本部大円寺では、昔からお客様を集めて一緒に食事をするのが盛んでした。この写真は1982年正月の、新年パーティーの時のものです。これは、地元の新聞社が取材に来た時に撮られたものようです。

インド人の家族は、日本が招聘した教育学の教授サクセナ氏の一家で、その後もお付き合いが続いています。昨年グジャラートの地震では、少し寄付金を集めてニルヴァーナ本部からお見舞いに行きました。その他、名古屋の国際研修センターで勉強していた研修生や留学生、さらにはその友達が集まっています。



皆さん今では立派になられて、それぞれの国で活躍していることでしょう。ここに並んだ食事は主にインド料理のようですが、日本のお釜が煮えたぎっていますね。子供たちにも手伝わせて、サモサを作ったことを思い出します。

桑名 本部

一口健康メモ

<プロバイオティクスとヨーグルト>

最近の健康志向の高まりとともに、プロバイオティクス(probiotics)と呼ばれる食品群が注目を集めています。これは、抗生物質(antibiotics)に対比されるもので、後者が微生物と戦って彼らを殺してしまうのに対し、前者は彼らとの共存を通じて、その恩恵を得ようとするものです。その代表例として、「腸内細菌叢のバランスを改善することにより、有益な影響をもたらす生きた微生物を含む食物製剤」、すなわちヨーグルトが挙げられます。主な働きは、便秘の改善などの整腸作用で、菌種によっては、感染防御、血圧降下、コレステロール低下作用なども報告されています。美味しさと健康を求めて、ヨーグルトの人気は益々高まっているようです。



20世紀は、化学療法・抗生物質の幕開けから、隆盛を極め、さらには恐るべき速さで耐性菌が出現するに至って、その限界を十分に思い知らされた時代でした。21世紀は“共存”の中に、人間を含めた全ての生物の活路を探し求める時代なのでしょうか。

楽泉園薬剤師 松本栄美